



# 高崎高校同窓会報

1990

発行所  
高崎高校同窓会  
〒370  
高崎市八千代町  
2-4-1  
TEL  
0273-24-0074

第24号 平成2年11月30日





表紙 本校図書館風景 撮影 岩山猛 (49回)  
表紙裏 定期戦勝利の瞬間 撮影 本校新聞部

あいさつ.....	同窓会副会長 小山 裕一	3
母校に赴任して.....	校長 金井 秀一	4
意外と幸運と.....	PTA会長 山田 博久	4
特別寄稿		
可能性を求めて.....	清水 健	5
高中三三誌発刊について.....	海老原英吉	6
乗附校舎通学記.....	佐藤 久義	7
思い出.....	本間 憲治	8
高崎だより①.....		9
論 壇		
50年前の建物.....	富岡 賢治	10
私の回想記⑩		
ひとりごと.....	内田 欣治	11
高校時代を美化すれば.....	八木 均	11
高陽中学のころ.....	正満 英利	12
長男と共に学んで.....	後閑 信子	13
卒業生の作品紹介⑥		
「野の宿」山口 薫.....		12
同窓会だより		
翠精育英会.....		14
高朋会.....		14
叙勲関係者紹介.....		15
山本氏大臣就任紹介.....		15
母校だより		
運動部.....		16
学芸部.....		17
対前高定期戦.....		18
母校職員人事異動.....		18
翠精文庫.....		18
進学状況.....		19
同窓会会計報告・予算案.....		20
新年総会へのお誘い.....		20
事務局だより.....		20



# 良き伝統を

## 後輩に伝えていこう

副会長 小山 禧一

柴山同窓会会長が健康がすぐれず病院に検査で入院されましたので、同窓会の会報に会長に代って御挨拶を書くように指示されました。それで、副会長である私が筆をとった次第です。

今年は大変暑さがきびしくそして長く続いた夏でしたが、さすがに十月の声をきくようになりすすと秋が深まって来ました。会員の皆様には益々お元気で活躍のこととお喜び申し上げます。過日の理事会の折、金井校長先生より母校の近況の報告がありました。野球部も久し振りに秋季大会に於てベスト8に入り、前高との恒例の定期戦も高々の快勝に終り、来年の大学入試も頑張り「文武両道」の言葉通り、努力されるといううれしい報告がありました。そのあとの議案審議の中で、七年後に迎える母校百周年記念の行事について色々と意見交換が行われました。事務局や役員の皆様から、幾つかの具体的な案が発表されました。

一、五〇〇人位収容出来る講堂を建設したらどうか。  
二、図書館をつくったらどうか。  
三、校内のバラ園を中心として庭園を整備したらどうか、等でした。いづれにしても百周年という大事な記念すべき行事なので、充分同窓生の意見を聞きすばらしい百周年記念にしようということ、百周年記念行事準備委員会を発足さ

せました。

理事の皆さん全員を委員にお願いし、委員長を柴山同窓会会長に、事務局は本部幹事の諸君にお願いし、色々と具体案の原案を作成して戴くことになりました。また募金については八十周年の時は約一億円位募金を集めました。更に甲子園に母校野球部が出場した折にも一億円程、同窓各位から募金に協力して戴いたことを基本に、今回の百周年の募金についても検討することに決定した次第です。準備委員会が発足したことにより一歩前進したことは喜ばしい限りであり、立派な記念事業を行いたいと思います。同窓各位の絶大なるご協力を心よりお願い申し上げます。

高々同窓会は、原前会長が總會を若い人に任せ活性化させ、大勢の同窓生各位が楽しく集まり、他校に類をみない盛大な總會を毎年行っています。更に翠穂育英会を創立し、優秀なる生徒に安心して勉学に励める様配慮されたり、更に柴山現会長は本部幹事会の充実に努め、同窓会と母校との連携を深め、後輩のためになる同窓会として活躍しておりますことは、皆様ご承知のことと存じます。それも同窓各位の支援と協力が必要ならば出来ないことであり、一致団結して協力する美風は我々の大きな誇りであり大きな宝であると思

います。百年を過ぎ、時代時代によって大きく変わって来ました。高崎中学から高校と名称が変わり、校章も校歌も変わりました。軍事教練もありゲートルを巻いて隊列を組んで登校した時代もありました。現在では市内から自転車通学が出来るようになり、黒いカラスの一人団が自転車で乗附の通りを走るのが名物になっていると聞いている時代です。

しかしいずれの時代でも、高々生であるという誇りを皆んな心に持っていたいと思います。

その誇りは大事なものと思いますが、あまり意識過剰になると閉鎖的になると思います。よそから来られた人が高崎に来て、あまりに高々、高女の意識が強いのので驚いたと私に話しをされたことがあります。私は「誇り」は心のうちに大事にしまっておくものであり、意識に出すものではないと思います。

百周年を迎える高々の同窓会が、地域にとって、社会にとって何をなすべきであるかを考える必要があります。それによって高々の存在が高崎の市民の皆さんに認められ、尊敬されるでありましょう。数多くの同窓生の中からは日本を背負って立った政治家も、経済人もたくさんおられますし、芸術・文化や各種学界にもすばらしい方々がおられます。またその反面、地域社会の片隅で黙々と人のために働いておられる同窓生が大勢おられます。そういった同窓生全員の一人一人が、高々の伝統をつくり守って来たものと考えております。良き伝統を後輩につたえていく一コマとして百周年を立派に迎えたいと念じているものは私一人ではないと思います。二十世紀をきっちり送り、新しい二十一世紀を後輩諸君にバトンタッチしようではありませんか。

(美峰酒類醸取締役社長 42回)



# 母校に赴任して

校長 金井 秀一

この度の人事異動により、高崎高校に着任いたしました。

九十三年の輝かしい歴史と伝統を誇る本校で、最初の同窓校長という名誉を担わせて頂いたことを、無上の光栄と存じておりますが、同時にその責務の重大さを痛感しております。

私は着任に当り、「当り前の事を当り前にきちん」と言うのを、すべての基本とし、本音と建前を乖離させることなく、校長として誠実に職責を遂行してまいろうと決意を新たにいたしました。当面の課題である大学進学という目標達成の為に精魂を傾け、かつ部活動に青春の情熱を注ぐと共に、常に、いつの日か国家社会に貢献できる有為な人材たらんと志を高く持った若者を育成したい、というのが私の念願であります。

高崎高校といえは、浮かんてくるイメージは、質実剛健、バンカラ、野性味、三下精神等々であります。先日こんなことがありました。対前高定期戦の結団式で、一生徒が「明日は前高まで下駄（ほうば）で踏破して、高高生の意気を示そう」と呼びかけました。当日、二十名の有志が学校に四時に集合し、護国神社で

必勝祈願のあと、四時間余かかって、無事開会式前に前高に到着いたしました。

とかく易きに流れる風潮の中で、あえて苦しさに挑戦したこれら生徒諸君の意気は、大いに壮とすべきであり、「高精神」健在なりの感を深くしました。

先年竜安寺へ参ったとき、こんなことが記されている立礼を目にいたしました。「一年を思えば花を育てよ。十年を思えば木を育てよ。百年を思えば人を育てよ」。本校もあと七年で百周年を迎えます。現在の隆昌を思うとき、高崎高校百年の大計をもって建学された先人の偉業に、改めて感謝の念がこみあげてくるのを禁じ得ません。

二十一世紀に活躍する高高の将来に思いを馳せつつ、私達教職員も、皆様の熱い期待にそうべく、全力を挙げて努力してまいれる所存であります。今後とも、同窓会の皆様の変らぬご支援、ご協力をお願い申しあげまして、就任のごあいさつといたします。

(50回)



# 意外と幸運と

PTA会長 山田 博久

この春、PTA実行委員会から会長に推されたとき私は再三にわたりお断り

をした。私がそんな器だとは思っていないし、それに在校中の私のことをかえりみれば、そんな資格などまったくないと思っただからである。同級生の古関武君などと誘い誘われのエスケープは日常茶飯事、英語の模擬試験でカンニングがみつかって清水淳雄君と職員室に呼びつけられてお目玉はもらおうし、学割を不正使用して高崎駅長室で担任の戸塚興嗣先生立ち合いで長々とお説教を受けたり、さすがに温厚な先生をしてそのワルガキ振りをあきれられた私が母校のPTA会長になるなんて、まったく考えられないこと

であった。だから私自身はまことに忸怩たる思いであったが、長い才月の経過は予期せぬ意外性を生むこともあるのか私でいいということになってしまった。もともとPTAは親睦的団体だから一度推薦したものをおろすことができなかったというのが本音ではなかったかと思う。それに今の高々PTAの組織は長年にわたる諸先輩の尽力により、まことに整備されていくような能力のないものでもやっつけていけるようなシステムになって

いるので、安心感が先行していたのではないかと思う。

そのうえ私にとって大変に幸運なことは前任者が同窓会本部幹事長の田中順先輩で、しかも二年連続会長役をやられたことであった。私も本部幹事の末席にいて長く親しくしていただき、田中先輩の教育に対するすばらしい熱意や見識に啓発されてきたので今日それが役立っているのではないかと思う。

おわりに自慢話を一つだけさせていた。今年六月、第五回全国PTA広報誌コンクールでわが高々が優秀賞の表彰状を受けた。もっとも対象になった広報誌は昨年十一月に発行した「爽風」第二六号であるから田中会長時のことであるが、おかげで私も写真に写されて上毛新聞に大きく掲載された。こんなことは私にとって二度とないことだから重ねがさねの幸運というほかはない。ともあれ、同窓生各位の一層のご支援を心からお願いしたいと思っている。

(新興技研代表取締役 52回)

## 特別寄稿

# 可能性を求めて



清水 健

いってしまったということのほうが多いのではないのでしょうか。そのようなきっかけが私には水泳だったということです。

私は水泳を近くの烏川で覚え、たまたま中学二年生の夏の水泳大会で水泳部員が不足していたためピンチヒッターで参加、その時の記録がなんと県児童新記録だったというわけです。このことが私の運命を変えました。この時の快感が水泳に対する情熱を芽生えさせたのだと思います。中学三年の時に初めて県外遠征試合が認められ、第一回全国中学水泳大会が東京で開催されました。私も代表に選ば

れ一〇〇m自由型に出場し、決勝で第二位に入賞、天野文部大臣賞の銀色の賞状を頂きました。マスコミから脚光を浴び勝つということの上に立ち注目されるということは、それがたとえ運が良かったとか偶然であったとしても人に欲を持たせるものです。その欲が私を頑張らせたいと思います。しかし欲だけでは勝てません。目的と使命感を自覚し毎日の努力と鍛錬に励み、一日一日を大切に積み上げて自信を持つこと、そして普段の力を出し切って勝つことによって得た快感は誰もが味わえるものではなく、それを思うと自分はなんと運の良い幸せな人間かと感謝しています。

国でした。古橋、橋爪等の名選手が生まれ泳ぐたびに世界記録を更新して世界を驚かせ、戦後日本の暗い時代を明るくさせていました。丁度その頃私は高々に入学し、水泳を本当の基礎から学び矢島明先生の熱心なご指導を受けました。こうして高々の3年間は体力を養いながら充実した水泳生活を送り、関東、東日本、全国高校選手権大会で好成績を上げることができ、矢島先生に大変喜んで頂いたことが昨日のように本当に懐かしく思い出されます。

幸い立教大学経済学部経済学科に進学が叶い、再び一層の可能性を求めて挑戦する機会に恵まれました。高々時代想像もしなかった程の激しい練習に耐え、鍛えに鍛えられました。夏シーズンにはもちろん毎日の鍛錬ですが、オフにも高崎に帰ることなく、室内プールの神田YMC A、東大地下室内、先輩の経営している伊東温泉プールで練習に励み、なんとか泳げる場所を捜しては一年中泳ぎまわりました。三年生のシーズンはアマチュア選手にとって出場が夢である最高峰のオリンピックの年でした。私も練習の効果が最大に発揮でき運よく第十六回メルボルン大会に選抜されました。私の素質を見出し高々から大学まで進路選択の面倒を見てくださった先生方、又多くの皆様からの応援を頂いたこと、心から感謝しております。

今回はからずも母校高々から投稿の依頼がありました。私はそんな柄ではなく、何を書いて良いか困りましたが、高々時代、学友とスポーツで青春を過ごし熱中した素晴らしい思い出があります。その当時「君にとって水泳ってなんですか」と聞かれたら、私は生活の張り、生きる張りだと答えました。私自身本当は怠け者でごく平凡な人間だと思えます。しかし実際には今まで、どちらかというと平凡とはいえない日々を送ってきました。世の中で活躍している人や波瀾にとんだ人生を送っている人たちも、初めから自ら進んでそういった生活を望んでいたのではなく、何かのきっかけで自分の人生が知らず知らずのうちにそちらへ流れて

この時代の日本は世界の中でも水泳王

たっているわけにもいかず、実際は三十二年も過ぎた現在、何をしているかというとはっきり申し上げて「何」とは言えません。だからと云って手を抜いているわけでもないのです。あの時代自分のエネルギーを一つのことだけに集中させていたのに対し、エネルギーを分散させているのだと思います。ですから、水泳をやってきたときのように情熱を何か一つに向けるということはないのです。逆にいうと水泳をやっている時は他に何かをしているときでも、やり残した宿題を背負ったような心境で夜でも何度も泳ぎました。しかし今は、何をやっている時もそれをしているときは何も考えずにそれだけに打ち込み頑張っていて、可能性に向かって毎日毎日奮闘中であります。

(日興證券高崎支店勤務部長 53回)



特別寄稿

高中三三誌発刊について



海老原英吉

まった。先ず原稿をたのんでも仲々集まらず、締切も何回も延期し、本年の三月末に一応予定した三十名を超えた。会員の中には手が不自由で奥さんに書いて貰った者もあり、係の者も感激しながら仕事を進められた。特筆すべきは、今は亡き友人のこと、又本人も奥さんもなくなりその娘さんが「父の思い出」を書いてくれたことなどであった。

在学中に満州事変が起り、体育の塚越先生、数学の若井先生が応募され、時には駅前の凱旋道路に出征兵士を送り、また英霊を出迎えに行く等戦時色が濃くなってき

昭和九年高崎中学校を卒業(33期)、やがて六十周年も近づいてきた。同級生も次第に減り、物故者も半数を超えようとしている。私達三三会も毎年開いているが、参加者は年毎に減る状況となった。そんなことから三三会員の中心から「回想録」のようなものを出したらどうかとの声があり、会誌の発刊にふみきることになった。

さて、係に当てられやり始めてみると原稿の依頼、編集、発行部数、経費―この算出の困難さ―等々、やりつけない仕事も次々と出てきて二三人ではどうにもならず、五人六人七人と増員し仕事を分担したり会議の回数を増やしたりして、私達としては仲々大きな仕事となってし

た。軍事教練も大分気合がかかり、学校も一般社会もそんな方向へ進んで行った。級友も陸士や海兵へと何人かが進んだ。このような空気の中でも高中の伝統精神といおうか自分の信念を持ち、嵐の中へ突込もうとする気概があった。

先生方も未だ余裕があったようだ。当時の高中の先生といえば社会的地位も相当なものであったし、放課後もコセコセせず、生徒と話したり運動もやったり、立派な先生、名物先生が揃っていたように思う。

そんな時に、私達が五年生の始め、同級生の大半が参加するというストライキがあり一騒動あった。その経過を述べるに長くなるが、原因として流れた情報は、

四月新任の先生(当時の中等教員の移動は全国規模で行われていたので、ずい分と遠い他県からの先生もいた)が着任時、先輩の先生から「高崎中学」はアバレンボーの生徒が多いから最初にナメられたら駄目だとのアドバイスがあり、勢いのり生徒の叱り方に行き過ぎがあり、翌朝の朝礼(毎朝全校生徒が校庭に集合し行われていた)の直前に脱糶ストライキに発展し、一同観音山へと向かうことになったと伝えられている。

卒業後はそれぞれの道に進んだ。就職する者、更に上級学校に進む者などいろいろあったが、大部分は昭和十一年兵として高崎第十五連隊に入隊、その後も次



々と兵役に服し、思わぬ外地で友人に会うことも多かった。戦中戦後しばらくは互いに連絡も取れなかったが、それぞれの職場で停年を迎えるようになり、同級会も三三会と名づけ、参加者も増えたが、前述のように、この数年は会員数が減って来た。会合に出席した者も「三三会の最後の一人は誰だろう?」との言葉も次第に冗談ではなくなって来たようだ。

懇親会は、その都度、盛会であるが、残念ながら現在の校歌は歌えず、いつも応援歌翠精と級会の歌として更に揃って歌えるのは歩兵第十五連隊歌である。一同全員相当忘れっぽくなってきているが、高崎中学時代の歌詞はよく覚えてるし、語りあいは戦争体験のことが中心となる。今日のこと昨日のこと互いの家のことを話す者は殆んどなく、昔話に始まり、そして前述の翠精、そして「秀嶺襟名紫に」のクラス会の歌へと続き、解散となるのが例となってきた。(三三会誌は母校図書館にあります。)

(保護司・警察協助力員 33回)

特別寄稿

乗附校舎通学記



佐藤久義

私たちは乗附校舎最初の入学生である。

入学試験ではじめて校門を入った頃はまだ建設の喧噪さめやらぬ感じであった。試験の前にしきりと冗談をいって気分をほぐしてくれたのは体操の富田先生で、後には大声叱咤、おおいにしごかれるのであるが、生徒思いの心情のにじむものがあった。

「二年生から上は引越して苦勞した。とりわけこの春の卒業生は大事のしっぱなしで、その分お前たちがいい思いをしている。だから校庭づくりはお前たちの仕事だ。せめて草むしりくらい一生懸命やって先輩の労に報いろ」。

作業の時間の最も多い一年生もこういわれると何となく納得できたし、この春

た。わからないと二年生に教えを乞う。

当時「お、優秀」というほめ言葉があった。ユニークな発想や迅速な反応に対して使われたので、必ずしも字義どおりの意味ではなかったが、そういわれると妙に嬉しかった。因みに一編目は一・二年生ばかり、二編目からは三年さま以上でなければ乗らないという不文律があった。(後の車には女学生が乗るからだ)と少したってから友人におそわった。ともあれよく勉強していて、中学生の勉強法を教えられたし、また友人との語らいのよい場でもあった。

「きたえき」着七時二十八分。プラットフォームは溢れんばかりの人の波。当時の北地域はまさに高崎の文教地区であっ

たから、北高崎駅利用の生徒数はおびただしく、周辺の賑わいは今からは想像もつかないほどであった。

三々五々連れ立って乗附に向かう。行き逢う上級生に敬礼、「オース」も次第に使い馴れた。先生には停止敬礼で、若い先生はひどく照れくさそうだった。立見屋の前を通り、四谷で右に折れて赤坂をくだる。常磐町交番前から「鳥の堤防」

を越えるのがメインルートであった。現国道十七号はまだない。鳥・碓氷の清流を千代橋・八千代橋で渡る。水量が増すと聖石橋へ迂回させられるほど脚の短い木の橋だった。中洲は砂ぼこりのひどい河原道で石を踏んで歩いた。開校記念日の一万メートル競走の出发点になった通称「セメント道路」で豊岡方面とつながっていた。畑がたくさんあって、作物荒しがあったらしく「いも泥棒に告ぐ」という書き出しの立札があった。二・二六事件の「兵に告ぐ」をまねたのだろうか、時代を映して強く印象に残る、いまのゴルフ場南端あたりである。

「碓氷の堤防」を登ると通かに乗附校舎が一望できた。が、ここからが長い。見えているから尚更である。名にし負う十五聯隊練兵場をめぐる道は陰を作るものが何にもない。暑さにつけ寒さにつけ「上和田校舎ならよかったのになあ」などと弱音を洩らしあうのもこの辺だった。暑いからといって勝手な服装をしたり、寒いからといってポケットに手を入れた

りはしなかった。端正な服装に厳しかった当時である。カバンの重い方も登校時は右肩から左脇へ、下校時はその逆ときまっていた。校則という気難しさよりも偏りない体という親心を感じた。朝は汽車が遅れて走り、帰りは汽車に間に合わないといって走った通学路は、いま住宅地の中にある。

鳥川の鉄橋をカラフルな電車が走る。しかし乗る人の数は往年に比すべくもない。あの頃は信越線にとっても最もよき時代だったのだろうか。この鉄橋に近く松井牧場のスマートな屋根がみえ、また竹藪を負って水車のまわる風景もあった。その近くに現在住んでいる私は、朝な夕な散歩時に半世紀の移り変わりを思い、白線帽の群れを車窓にのぞかせて走ったまっ黒な汽車と乗附への道を思い起こすのである。

（西部教育事務所 生徒指導相談員 43回）



特別寄稿

思い出



本間 憲治

昭和五年三月の卒業で、現在社会で活躍されている同級生は四九名である。入学時一五〇名卒業時二二八名だったので、むしろ生長らえていると言つて良い人数である。私も一時期野球部に在籍した事がある。片岡、後藤、佐藤諸先輩がおられた。当時でも野球の成績を挙げる為輸入の選手が何人か龍ヶ崎中学から来ていた。私はその後剣道部に入り卒業までいた。剣道の先生は中島先生で鬼秀の称号を呈上していた。私は身体の方は自信があったので陸上競技にも一時顔を出した事もある。剣道は二段を貰った。小学校の時から野球をやる等運動に熱中したお蔭で小学校六年、中学五年、桐生工専三年計十四年皆勤した。中学卒業を目前に

した折、漢文の小山先生から本間は一高を受験しなさいと執拗に勧められ、私自身もその積りでいたのだが父の猛烈な反対に逢い桐生高等工業を受験せざるを得なくなった。一応無試験で入った。父にすれば自分が開発した捺染業をどうしても継がせたかった訳である。父は明治三四年京都から高崎に来て捺染業を開始。高崎地区捺染業の元祖となり伝統産業たる捺染業を高崎全市に普及し、西の京都、東の高崎、東京と言われる程の隆盛であった。然し現状より一歩前進の意味にて、人手に依る捺染加工から機械化に依る捺染に移行すべく捺染機を導入したのであるが、時期尚早の為適当な注文主の獲得が出来ず失敗。昭和町(当時請地)から飯塚町へ移転の止むなきに至った。時に昭和七年である。私自身は昭和八年三月桐生工業専門学校染色化学科を卒業した。卒業後直ちに捺染工場を継承する事になった。種々の伝統的作業を近代化すべく努力中、大東亜戦争勃発。工場の規模に依り軍需工場に転換せざるを得なくなり、社名も「群馬兵器製作所」とし中島飛行機製作所の下請工場となった訳である。偶々先日逝去された群馬トヨタ自動車(株)会長の横田喜好氏(同窓会副会長横田英一氏の尊父)のご協力を得て始まったのである。之もスキーが取り持つ縁であった。

其の後社名も本間産業株式会社と改称し、飛行機部品の製作に没頭していた訳である。折しも私に召集令状が来て三八部隊に入隊する事になった。後事は横田氏に托し軍務に精励した。横田氏は私の代りに全く言葉に尽せぬ努力をされた。業績も益々上昇した。幸い教育召集であったので四ヶ月で召集解除になったのであるが、其れから四ヶ月して再び赤紙召集となり三八部隊に再度入隊した。軍隊生活に体験の無い方には全く理解出来ない事の連続であった。此の時期に横田氏は私の召集解除を願つて陸軍省に何回となく出向いて「軍需工場の責任者であるので是非解除して欲しい。」と懇願してくれた訳である。その願いが叶つて四ヶ月で召集解除になったのである。斯くして昭和二十年八月終戦となった。

比処で本間産業は自動車部品の製造工場に転向し、横田氏は自動車部品の販売に役事する事に決定。田町の駒林茶店の一部を借入れ「三和商会」の名称にて、横田喜好氏が代表となり当時の桜井弥助氏と私の三人にて自動車部品屋を開業した。終戦後自動車部品が払底の時期であったので需要多く、成績増大であった。此の折横田氏は部品の販売より自動車の販売に移行しようとして、トヨタ自動車本社の神谷正太郎氏を訪ね、その権利を得、群馬トヨタ自動車(株)が始まった。私も取締役の一員となった。私の方はやはりトヨタ本社の下請工場となり部品製造を担当、従業員一五〇名を以て製造に従事したが、受注部品の難度の高いものを受注して失敗した。之を契機に、本間産業も解散せざるを得なくなった次第である。

次いで昭和二十七年「株式会社本間捺染工場」を設立し、再び伝統産業開発に従事。十日町滝文工業(株)を主として、所謂きもの染色に従事した。近時婦人の「キモノ離れ」現象の増大に依り受注量は激減し、今や高崎捺染協同組合の存在も考えねばならぬ状態に立ち到つたのである。私の工場は当面ネクタイの捺染加工に全力を傾注している。

人間の運命は些細な原因で右へも左へも変動するものなので、何時も「高々精神」を矜持して、細心の調査と研究に依り或は努力に依り、万全の準備研鑽を経て健康に留意行動する事が大切である。

株式会社本間捺染工場会長  
群馬トヨタ自動車監査役 29回



# 市制90周年を迎え、新たなスタート 「交流拠点都市・高崎」

高崎市の市制施行は明治33年。それから90年の間に全国屈指の交通拠点性をもつという恵まれた環境の中で、北関東を代表する都市として着実に発展してきました。

現在、上越新幹線と関越自動車道に加え、北陸新幹線、上信越自動車道の工事も始まりました。JR高崎駅の周辺の変貌もめざましく、市街地の再開発が急ピッチで進んでいます。

その交通拠点性はますます高まり、また世界都市東京のバックアップ都市としての役割が期待されています。

そんな中で市制90周年を迎えた高崎市では、「いきいき、いきかう、人・もの・文化」をキャッチフレーズに、この1年間、高崎の新しい息吹と可能性を全国に向かって情報発信するとともに、新しい都市文化の創造を図るためにさまざまなイベントが開催されました。

春――。4月1日のオープニングイベントでは「ひと・まち・出会い」をテーマ



に華やかで楽しい音楽とトークのコンサートが繰り広げられました。トークショーでは、福田超夫氏、井上房一郎氏、松浦市長が、高崎の90年の歩みと世界に発信する都市高崎の建設に向けて夢を語り合いました。

また、群響の東京駅コンサートが5月から11月まで5回シリーズで開催され、音楽のある街・高崎を強く印象づけました。

「ときめきステーションたかさき」をテーマにした夏のイベントは、市民の誇りである群馬音楽センターの設計者でもある、世界的建築家アントニン・レーモンドの建築と思想をさぐるフォーラム。また群馬音楽センターと前庭では、コンサートや映画上映があり、多くの市民が



夏の夜を楽しみました。

さらに、高崎市と姉妹友好都市提携を結んでいる4市との「姉妹都市サミット」と「姉妹都市芸術祭」が開催され、市民レベルの国際交流が行われました。

秋には、「高崎音楽祭」が約1カ月間の期間で開催されました。オーストリア、チェコスロバキア、アルゼンチン等からアーティストを招聘。群響との共演による音楽創造も試みられ、高崎を文字通り「音楽のある街」に育むための新たなスタートとなりました。

こうしたイベントを通して、高崎は交流拠点都市として、21世紀に向けて新たなスタートをきったのです。

## 50年前の建物

富岡 賢治



先日、久し振りに高々を訪れた。周辺の街並みも、校舎も職員室や自転車置場も、私が卒業した二十五年前とは一変していた。ただ日曜日なのに野球部などの練習が盛んに行われ、部室の入口のあちこちに前高定期戦に向けた楨文が貼られている様子は昔と同じであった。青白い進学校であつてはいけないとの気風が今も残っているのかなあ、暫時練習ぶりに眺め入った。しかし、私の高校時代、楽天的に過ごした日々を鮮やかに蘇らせた物は、何よりあの正門近くのバラ園と古い講堂であつた。放課後、井上さんが丹念にバラの手入れをされている姿をよく横目で見ながら帰宅したものであつた。また、講堂は昔の姿そのものであるが、切り妻の屋根の瓦の落下危険防止のために今や周囲をロープで立入り禁止の状態にしてあり、何やらこの一角だけが、月日の流れから切り離された風情であつた。

さて、この講堂は一体どうなるのであろうか。耳にするとところによると、平成六年が高々創立百年に当たり、同窓生の間で何か記念事業をという気運があり、種々出され始めたアイディアの中に、この講堂の改築案なども上っているそうである。私も仕事柄このような施設の将来については関心もあり、いろいろな選択肢を考えてみたが、具体的なこなしとなるとこれはなかなか難しい。

この講堂はまず、昭和十五年に建てられ、高々が今の地に移転した時の建物の内唯一残っているものである。そこで第一に考えられることは、保存である。ただかか五十年とは言え、古い物、我々の記憶に残り続ける物としてできる限り保存して行く姿勢は最も望ましいと思われる。しかしその修復と維持が技術的に無理であれば、いたしかたない。そうなる第二は、取り壊して全面的に改築という事になる。しかし新しく講堂を建て直すことを、公的に要望することは、高々がすでに公立学校として必要な体育館や格技場等の施設配置が概ねなされ一般的水準を満たしている事から、無理な話となろう。この場合極めて多額の私的浄財に頼らざるを得なくなろう。第三は、何か地域社会にも開かれた教育的な施設ができないかという考えである。近年、高校の施設を活用した社会人向けの講座の実施は各地で多く、まちづくりの一環としても今後一層推進されるべき課題である。そして、この種の観点からの施設の複合化は、特に都市部で様々な斬新な試みが企てられている。ただこのような事は学校教育本体に支障をきたすものであつてはならない。従つて、内容や得失をよく考えないと、単純に学校の土地を割愛して他の用途の施設をその上に作るだけの話となる可能性もあり、慎重に扱われるべきであらう。第四は、同じく地域社会に開くという点から高々生と社会人にも利用できるスポーツのための

クラブハウスが考えられる。公的な措置と共に浄財をも含め、トレーニングルームやサロンの瀟洒な施設作りは、かなり現実的であろうが、必要性や内容は多に議論の余地もある。第五は、公の措置は現状では期待できそうもないが、教育の多様化に対応して自習室や語学用のラボや談話スペースをまとめた多目的教育施設や、例えば総ガラスや木造りの食堂やサロンの建設なども、高校生活にゆとりと潤いを持たせるものになろう。第六は、今では、観音山や鳥川の辺を散策し友情を深めるなどという雰囲気も薄れてきていけるとすれば、ハードな物は建てずに在郷の建築家などのデザインによる新しい型の憩いのスペース作りや、庭園の拡大、入ってもよい芝生などの明るいキャンパスにすることも考えられよう。

思いつくだけで、こんな幾つかの案を述べてみたが、創立百年記念の事業として取り上げられるかどうかは別として、これからの高々生にどのような高校生活を送らせたいかという視点は勿論、場合によっては、地域に於ける高々の役割、高崎や周辺のまちづくりとの関係など多様な角度からの議論が、同窓会の方や学校側から出され、この講堂の将来についても一つのよい案がまとまってくることを願っている。

(文部省体育局学校健康教育課長 64回)

## 私の回想記



講堂

ひとりごと

内田 欣治



突然、同期の友松敬三から、高々の回想記を書けとの指名である。以前に書いたことがある

し、又、今回書くとも来年のこともあるので生ぐさいから自分が書くのはふさわしくないというのが彼の遠慮の理由である。いやとは言えない生来の人のよさから引き受けたものの、一向にペンを手にする気持ちになれず、引き受けなければよかったと悔やまれる。

今まで、日々の忙しさに忙殺されて、自分が卒業した高校を、高校生活を振り返ったこともなく、重たいペンをとるために改めて、アルバム・成績表をほこりの中からさがし出し、一ページ、一ページをめくっているうちに、三〇年前のことが昨日のことのように回想されてくるから不思議である。一人一人の顔と名前と、現在の活躍ぶりを思うとき、改めて、自分の周囲に多種多様の優秀な人材がいることに感心し、やっぱり高々を卒業してよかったという気持ちになるから面白い。

弁護士を開業して十七年。高校に通っ

ていたころから将来法律家になろうという強い目的意識があったわけではない。最近司法試験の合格者の高齢化から、受験回数・受験年齢の制限等司法試験の平等・公正から考えると大いに疑問のあるところであるが、それにしても、よき時代に生まれ合格してよかったと胸をなでおろしている。

当時から司法試験の困難さは耳にしていたが、高々時代を劣等生ですごした私が合格できたのは、故人で弁護士をされていた菅沼利雄先生の「前高・高々に入る成績があれば必ず合格するよ」と言われた言葉が、大きな支えでもあったからだと思っている。だから、よく後輩や、司法試験をめざしている子供をもつ親から不安をうちあけられると「大丈夫だよ、努力さえすれば合格する試験だよ」と励ましている。何も、へりくだって言っているわけではない。実感として心からそう思っているからである。

司法試験に合格し研修期間を終えて、高崎に戻ってきたのが昭和四九年。以来、人と人との間の紛争の解決に東奔西走している。時代も昭和から平成に変わり、時間の流れとともに、時代が大きく変化し、人の価値感も多様化しているなかで、人と人との紛争の中身も大きく様変わりしている。

ロッキード・リクルート等政治の浄化が叫ばれ、一向に浄化される気配がない政治的風土のなかで、物質万能・金銭万

能が人の心を支配している昨今、人と人との紛争も増えこそすれ減らないような感じを抱いているが、さて残された人生をどう生きるか考えても明確な指針がつかめず悩みはつづきそうである。現在高崎(西毛地区)で活躍している弁護士は三五名であるが、内十三名は高々の出身者である。一人でも多くの後輩が、法曹界に入って活躍することを期待している。久しぶりに校庭をのぞいたが、昔と変らずバラの花が美しい。

長男は来年、高々に入りたいと言って受験競争のまったなかである。

(弁護士 61回)

## 高校時代を美化すれば

八木 均

全国大会出場という一つの大きな目標を掲げ、途中で挫折しそうになった時は互いに叱咤激励し合い、日々の鍛錬を続けた結果、最後の最後にその夢を実現することができた。いま思い返してみると、つくづく運が良かったなと思います。

私は高校三年間、サッカー部に所属していました。

これからの人生において岐路に立たされた時、あえて険しい道を選んで欲しい、という名言を残して引退した中町主

将(79期)。その後を継いだ中村主将(80期)は、自分に厳しく、他人にも厳しく、妥協を許さない人で、特に冬場のランニングを中心としたトレーニングには非常に厳しいものがありました。おかげで体力には絶対の自信をもって試合に臨むことができたものです。同期の主将だった清水清志君は、チームの勝利のために何をすれば良いかを常に考え、小柄な体にもかかわらず大きな声を張りあげて、一人でチームを引っ張っていました。高校生活最後の大会だと思っていた夏のインターハイ県予選の準決勝で、若手中心の新島学園に〇対四で完敗し、夢破れた同期の仲間が次々に引退していく中彼は冬の選手権大会を目指して、一人で練習に励んでいました。彼のサッカーに対する情熱と、その彼の熱心な説得がなかったら、最後の最後の大会に全てを賭けようという気にはならなかったと思います。

良き主将がいた時代でした。そして良き主将に引っ張られつつ、自発的に練習していた時代でした。人に無理矢理やらされるのが嫌いで、特に理不尽なしごきは断固拒否していたのは高校のサッカー部としては特異であったと思います。かと言って練習に手を抜くわけではなく、とにかく自分で納得するまで練習する集団だった気がします。県予選の中央大会が始まろうとする頃、練習が終わった後に、誰に指示されるわけでもなく、観音山ま

でランニングする部員が日ごとに増えていった時、「これならいけるぞ」と思っただけです。大事に臨む時、自分なりに納得のいく準備ができていのか否かが大切であり、自分が本当に納得していればそれが自信につながり、自然と良い結果を生むことになる」ということを身をもって体験できたことは、元来気弱な私に大きな勇気を与えてくれました。

中学までは人間を育てる場、高校は人格を形成する場、大学は人格を磨く場、そして社会は人格を発揮する場と言えるのではないのでしょうか。人格を形成する大切な時期に、サッカーを通じて素晴らしい人物に出会い、ともに一つの目的に向かって日々努力した結果、大きな成果を勝ち取ることができました。美化するにあまりある高校時代だったと思います。

(備前芝・総合研究所勤務 81期)



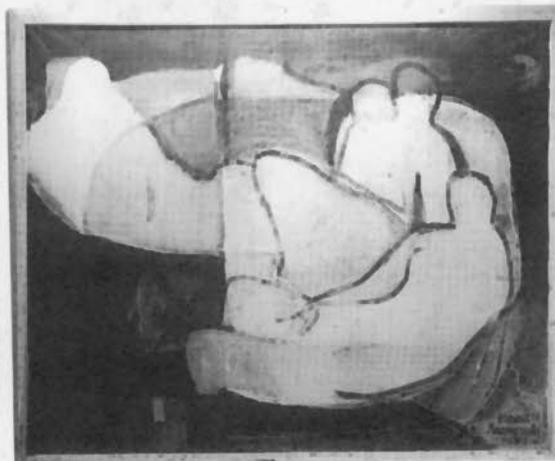
山口薫はこの絵について次のように語っている。「『野の宿』とは『野宿』である。毎日毎日野宿をしているような気持の生活が出来たらよいが。初めは二人、三人の群像を描こうと始めたが

制作の過程で意図も構成も変わりこの画面になった。群像を羽根の下に包んだ鳩や夜明に近い月は最後の構想から描いた。白と黒を生かしたかったのは最初からの気持です」と。

卒業生の作品紹介  
<6>

山口 薫

### 「野の宿」



1951年作 130×161 (高々蔵)

## 高陽中学のころ

正満 英利

高陽中学、いまの若い人達に訊ねても知る人はいない。

因に、昭和四十四年発刊の「高崎市史」を繙いても、県立高崎高校の沿革に「昭

18・4高崎市立高陽中学校(夜間制)本校校舎を借用し創立」とあるだけでは知る者ぞ知る、だろう。

高陽中学に専任教師も数人いたが、校長以下、殆んど高崎中学の兼任、だから学制改革で市立高校に改称されようと、県立高崎高校の定時制に併合されようと何も支障は無かったのだった。

しかし、高陽の校名をあくまで固持し、定時制移行を拒み、夜間でも校舎が整えば普通校と、幾度か市当局に独立を陳情

したが、時の流れに抗することができなかつた。

そんな片意地もあって母校を省りみもせず、心の赴くままに職を替え、住いを変え、流転の半生を過し、高崎に戻っても学校には所在不明のままだった筈だが、どんな弾みか「回想記」の原稿依頼が舞い込んできた。

今更、名も無い夜学生の回想でもあるまいが、夜学生の故に蔑れた気遣を始め、様々の思いが脳裏を回って押えられず、恥も書き捨てとペンを持った。

思えば、夜学生はよく勉強した。働きながら学ぶという根性があった。中に喧嘩の好きな「悪」もいたが、それとて警察沙汰になったこともなく、学業も怠らなかつたから学校では黙認した。尤も、配属教官は学生を二列に向き合わせ、互いに顔を殴らせる「タイコピンタ」を時々やったのだから、力を張り合う喧嘩なんぞ、休み時間のスポーツのようで見物する学生も多かった。

教室には裸電球が九ツさがっていたが、何時も二、三灯は切れて消えていた。

物資不足で、真冬でも火の気は無く、割れたガラス窓から寒風が容赦もなく吹き込んで来た。そんな薄暗い冷えきった教室でオーバーに身をくるませ、ガタガタ震えながら授業を受けたのが当時の夜学生だった。

終戦が近付くと、敵機の空襲が連日連夜続いた。警戒警報では消灯して解除を

待ったが、空襲ともなれば真暗闇の中を急いで帰宅したものだ。

高崎の中心が爆撃された翌日、終戦となったが、終戦では、わが級にも変動が起った。それまで、全く目立たなかつた一人が、「俺は朝鮮人だ」と急に変貌して威張り出した。すぐに朝鮮に帰って行たのでホッとしたが、敗戦の惨めなことをこれで知った。

まもなく岩鼻の火薬廠が解体し、養成所から多勢の転入、若い帰還兵の復学が相次ぎ、一時は級も混沌としたが、去る者は去り、学ぶ者だけとなると授業も平靜になった。やがて、甲種の四年制に、更に高校制で一年の延期があったが、何時の日か、独立校の夢を抱いて卒業したのだった。

(市立高校 2回)

## 長男と共に学んで

後閑 信子

長男の中学校入学を機にと、日頃の念願であった高通信制入学を次男誕生という現実で三年後に漸く果たす事ができました。初めの一年間は、学べる喜びと目的を同じくする多数の級友との交流が楽しくて、瞬く間に過ぎてしまったような気がします。

三歳になったばかりの次男を背負って臨んだ入学式。手にした真新しい教科書の感触が、少女時代を思い起こさせました。胸を躍らせて臨んだ初めてのスクーリング。生徒会ハイキング。夏季合宿スクーリング。体育祭の応援合戦。そのいづれを通して友との絆を深める事ができました。卒業に必要な多くの行事に参加できたのも、主人や子供達の協力と級友の励ましがあったからです。レポート、テストは相応の努力如何で対応できますが、スクーリングや行事への参加は、他の協力や理解なしではできない面が多分にあるからです。

通信制の生徒の大半は周辺地域からの通学ですが、とりわけ私のクラスは遠方からの通学者が多く、それでも四年間での卒業を目指して頑張っていました。何時間もかけての通学はそれだけでも大変な事ですが、学ぶことへの喜びと意欲が逆に距離を縮め、卒業への道のりを近いものにしたのではなかつたかと思えます。その人達に比べて三十分足らずで通学できた私など、弱音を吐いてはいられませんでした。

グラウンドに舞う桜の花びらを手にして受けた生物の授業、観音山の緑を背にしての体育の授業、大ケヤキの紅葉を眺めながら受けたテスト。日曜日、全日制の運動部員がグラウンドを駆け回る姿を、頼もしく眩しく眺めた事。その一つ一つが昨日のことのように回想されます。

そして二年次の春……。「お母さんが先輩だからネ。頑張ってあなたもこの学校にいらっしやいよ。」と冗談を言われていた長男が、高高に入学しました。我が子の使った同じ机で受ける授業を通して、学ぶことの充実感と高校生活を共有できる喜びを与えられました。それは息子との間の得がたいスキンシップの一つでもありました。そして、日を追う毎に「この学校をあの子と共に卒業しよう。」そう思い始めていました。

六十三年三月七日、長男と共に卒業式に臨む事ができました。長男の照れ臭そうな笑顔は私の気持を和らげてくれました。「私の高校生活がこれで終わる。」という淋しさと、新たに旅立つ長男への祝福とが交錯し、言いようのない充実感に満たされていました。

まだ子育ての終わらない現在、次へのステップは足踏みの状態ですがいつかきっと、新たな一步を踏み出したいと深く期しています。

(通信制 30回)



# 同窓会だより

## 翠巒育英会

—その発足のころ—

國峯 善次郎

翠巒育英会が発足して六年目を迎え、同窓各位の御協力・御支援を仰ぎ乍ら年々充実発展の一途を辿っている事は大変喜ばしいの一言に尽きる。

昭和五十五年十月の常任理事会に於いて、同窓会の活性化を計るべしとの話題が出され、結果として同窓会總會を賑やかに持ちたいと意見が一致し、原前会長(29期)より五〇期が開催当番期として努力して欲しいと依頼を受け、翌昭和五十六年正月の總會に向けて五〇期一同による準備が早速始まった。

昭和五十五年十一月、野球部が秋季関東大会に県代表と成り、水戸市で活躍、準優勝し甲子園出場の栄を掌中にした。

初の母校甲子園出場と言う事で、学校も同窓会も大いに意気高揚、昭和五十六年一月三十一日の高野連発表前に五〇期は上毛新聞に、「母校の快挙、甲子園間近し」の見出しで同窓会員に總會出席を呼びかけた。無事三百五十余名の出席を得て總會終了、原前同窓会長始め先輩諸氏から祝意が寄せられ、以後卒業後三〇年、四十八才にしての總會当番期が定着した。

息継ぐ間もなく野球部の甲子園出場が決

定し、小山野球部後援会長(42期)小森谷後援会幹事長(47期)を中心に募金活動が始まり、両氏を中心として同窓会、PTA、翠巒体育会、野球部関係者等総ぐるみで得た合計金額は一億五百万円を超えた。

このチャンスを生かして原前会長は、同窓会の一層の充実を計るべく、同窓会役員組織化と会報の充実を、当時翠巒体育会で御世話に成って居た私と、友松敬三君(61期)に持ちかけ、小森谷先輩の助言を得乍ら理事、常任理事の人選を各期に依頼した。五十六年七月、既に発刊されて居る翠巒体育会々報と同程度の同窓会報発行作業が始まり、田中(51期)山田、岡村(52期)友松(61期)秋池(65期)菅田(71期)校内幹事田端、真砂、先生等のスタッフで年末に一新された会報の発行を見た。

かかる作業をしている間、いつしか本部幹事会として以上の者が原前会長からの指示を受け、同窓会運営の事務局的な存在として会議の決定事項の遂行に当たった。

昭和五十八年十二月、本部幹事会の忘年会の席上で、すでに小山野球部後援会長から同窓会に対して、募金剰余金として寄附されている三千万円の管理について話が出て、大義名分化された形で大切に運用するには育英会を設立活用しようという意見が一致した。

以後現本部幹事長田中君を中心に学校側にも協力を働き、六〇年一月法人設立場所を得るに至った。この基金は丸二年間、同窓会預り(基金運用委員会)で管理されていた。

この二年間高々運動部の全国大会出場が度々あり、その都度関係OB諸氏が募金活動する度に耳にした苦言は「例の金を使え」であった。

翠巒体育会の役員会でも話題事項に成り、この金の性質上全国大会出場に使用しても差しつかえないものに理解されたが、限られた運動部のみその恩典に預るのは考えものだ、と言う事で話が止まった。

しかし乍ら、全国大会に出場する部のOB諸君は一致団結し募金に当たった結果、単独OB会で可成りの集金母体に成長し、同窓会預りの三千万円に対しての食指が遠のいた。

翠巒育英会は野球部の甲子園出場に、大勢の人達の善意により誕生した。

(愛善会理事長 50回)

## 高朋会だより

清水 修

先日、前幹事長の深堀正先輩(58回)から高朋会に同窓会報の原稿依頼がきているので書くように話があり、簡単に引き受けてはみたものの何を書いたらよいか考えがまとまらず迷っているうちに締切日が間近に迫ってしまい、今はもう開き直った心境で学生時代の一夜漬けの勉強を思い出しながら筆を進めているところである。

高朋会は、群馬県庁に勤務又は関係する高々

(高中)の卒業生(在籍・勤務者)の同窓会である。現在の会員数は四百二十一人で、その内訳は県庁(教育委員会等各種行政委員会等を含む)職員三百五十九人、議員五人(国会一、県会四)、報道関係等十五人、県庁OB四十二人である。

高朋会員の活躍ぶりは、県議会において、議長・副議長の要職を松沢睦(47回)、塚越輝夫(36回)の両先輩が占めているのを初めとして県政の各分野で要職を占め重責を果している。高朋会の定例行事は、新年総会と新入会員歓迎会で、総会は例年二月に実施しており今年は二月二十七日に県庁前の群馬会館で盛大に開催され、八十八人が出席し懐かしい思い出話に花を咲かせ、最後は全員が肩を組み合せて校歌、応援歌「翠樹」を歌い、それぞれ同期の仲間と連れだって散会していった。また、新入会員歓迎会は例年より遅れ六月二十一日に市内「みやたや」で新会員十一人中八人と幹事七人の計十五人が出席し、同窓の絆を大事にするともに大いに利用し、それぞれの職場で頑張ろうと激励した。

現在の役員は、会長が横山巖前教育文化事業団理事長(38回)、副会長は関口實FMぐんま社長(40回)と入澤哲夫商工労働部長(50回)の二人、幹事は私以下二十二二人(64回から85回)からなり会の充実に努めているところである。以上高朋会からの報告であるが、最後に母校の益々の隆盛をお祈り致します。

(高朋会幹事長 64回)

## 叙勲者紹介

平成元年及び二年に叙勲された同窓生を御紹介いたします。なお二年は現在判明した方々ですので情報をお寄せ下さい。

### 平成元年

勲三等瑞宝章 岡本正己氏(33回)

教育研究功勞

勲四等瑞宝章 齋藤與總治氏(35回)

地方自治功勞

勲五等双光旭日章 石井清二郎氏(31回)

教育功勞

勲五等双光旭日章 佐島全次氏(34回)

薬事功勞

勲五等瑞宝章 小林良曹氏(28回)

地方文化功勞

黄綬褒賞 安藤直典氏(45回)

業務精勵功績

藍綬褒賞 富澤一行氏(42回)

日本工業規格の制定普及功績

### 平成二年

勲四等旭日小綬章 中野敏宗氏(顧問)

教育功勞

勲五等双光旭日章 土屋利雄氏(33回)

教育功勞

勲五等双光旭日章 清水俊助氏(23回)

社会福祉功勞

勲六等单光旭日章 佐藤利男氏(43回)

消防功勞

## 山本 富雄氏 農林水産大臣就任



本年二月二日の第二次海部内閣改造で山本富雄氏(45回)が農林水産大臣に就任されました。山本氏は昭和20年旧制高崎中学を卒業し陸軍予科士官学校へ進学されましたが、終戦のため郷里草津町に帰郷し、昭和30年26歳の若さで草津町会議員に当選されました。昭和42年群馬県会議員に当選され、県政の数々の要職を歴任し三期をつとめた後、昭和52年参議院議員に初当選され、連続三期当選されています。国政でも通商産業政務次官や自由民主党の数々の要職を歴任されています。

農林水産行政は日米農産物交渉など数々の難問をかかえているようですが、山本氏の今後の御活躍と御健勝を祈念申し上げます。

◇運動部報告◇

惜しい「花園」

—長いトンネルに光が—

全国大会には個人で軟庭部

低迷を続けている本校運動部に光がさしはじめた。



ラグビー部

今年度の最後のイベント全国高校ラグビー県予選で、ラグビー部が堂々と決勝に進出、六年ぶりの花園が期待されたが農大二高に惜敗。

専門的にはいろいろ敗因もあろうが、この高々の現在の情勢下では、はなれ芸であったし、快挙という外はないと思う。これがよい刺激剤となって高々生の魂をゆさぶり、各々が一丸となって来年の総体、全国大会に成果があらわれるのを期待します。

それでは今年度の各部の活躍をのせてみます。

◎軟式庭球  
県総体—団体ベスト8  
関東大会—個人(梅田・砂賀組3回戦)

個人(高田・砂賀組3回戦)

インターハイ県予選—団体2回戦

インターハイ出場(梅田・砂賀組1回戦)

◎陸上競技

県総体—一六〇〇米リレー—第六位

走り高跳び(石橋—M九〇—第四位)

三段跳び(石橋—四米四四—第二位)

ハンマー投げ(金井—四—米四〇—六位)

関東大会—三段跳び(石橋修—第七位)

◎野球部

春季大会—二回戦、夏季大会—二回戦

秋季大会—準々決勝 桐—8対1高々

◎ラグビー

県総体—一回戦、一年生大会—二回戦

全国大会県予選 決勝農大二33—7高々

◎サッカー

県総体—一回戦、インターハイ予選—一回戦、県高校予選西毛地区—継続中

◎バスケット

県総体—準々決勝

第五回栃木群馬交流試合—優勝(群馬4

栃木4チーム)、インターハイ予選(準

々決勝)、強化大会(Aブロック準々)

◎バレー

県総体—ベスト16

インターハイ予選—ベスト16

秋季大会—ベスト16

◎剣道

県総体—団体準々決勝

インターハイ予選—団体ベスト8

個人戦(ベスト32位)

学校対抗団体(一回戦)個人(3回戦)

◎柔道

県総体—2回戦、インターハイ予選—2回戦、個人戦(軽量—藤巻・天田5位)

軽中量・中量級ベスト16

学年別大会(一年天田—軽量3位、

その他ベスト16)

◎弓道

県総体—団体ベスト16

個人—矢嶋伊知朗—優勝

インターハイ—ベスト6位

西毛地区—団体優勝、個人 福島優勝

◎テニス(硬式)

県総体—ダブルス(嶋田・森平)3位

◎空手

県総体—個人組手(御園ベスト8)

インターハイ予選—個人組手(南雲—8)



軟式庭球部

◎山岳

県総体11位(参加校21校)

その他1集中登山大会第一部参加

◎卓球

県総体1団体(1回戦)個人(3回戦)

インターハイ予選(1回戦)

学年別大会1個人2年・1年とも3回戦

◎軟式野球

県総体12回戦

インターハイ予選12回戦

新人戦1前工(1対0)高々

◎スキー・スケート

県総体(平成3年1/8)12開催

インターハイ予選(平成3年1/28)30

新人戦(平成3年3/25)27開催

◎水泳

県総体1百米バタ3位、二百米個人メド

レー・四百米リレー4位、四百米メドレ

16位

関東大会出場(高橋・中曾根・中島・石

曾根・小淵)

新人戦1二百米バタ(稲葉2位、山本4

位)百米バタ(菊地2位)百米自由(菊

地5位)四百米個人メドレー(稲葉3位)

以上ですが、現在新人戦を前に各部頑

張っておりますが、特にラグビー・バス

ケット・サッカー・柔道・一年の水泳な

ど期待される種目です。

(運動部長・川嶋尚武 49回)

◇学芸部報告◇

群馬県高等学校芸術祭

写真展に二年連続入選—写真部—

〈写真部〉

私達写真部は、昨年度・今年度と2年連続して、群馬県高等学校芸術祭・写真展において、数百点出品された中から、県代表に選ばれるという、輝やかしい成績を上げることができました。さらに、昨年度選ばれた新井達也君の作品は、今年8月に行なわれた、全国高校総合文化祭写真部門(山梨県県民会館)に出品しました。この文化祭では、惜しくも入賞することはできませんでしたが、部員数名が休みを利用して見学に行き、大変良い勉強をすることができました。また、今年度選ばれた星野秀樹君の作品は、来年度の全国総合文化祭に出品する予定です。

最近では、一般の写真コンテスト(上毛新聞社主催、富士フィルム主催他)においても、部員数名が入賞、入選を果たすなど、大変活発な活動をしています。部としては、主に学校行事や各種大会などの撮影を軸としています。その他の日などは、個々での撮影や現像、焼き付



新井達也君の作品

けに時間を費やしています。また、高崎市他の高校(高崎女子、高崎市立女子、高崎東、昨年まで東京農二、中央、高崎工業も)と交流をもつために、高崎市高校写真連盟会に所属しています。連盟会の活動としては、モデル撮影会、合同連盟写真展、その他年数回の話し合いなどです。そして、日々の努力の発表の場として、翠精祭での展示、高校芸術祭、合同連盟写真展への出品、校内写真展の実施などを行っています。中でも、翠精祭においては2年連続で最優秀展示賞を受賞



星野秀樹君の作品

することができました。

これからも、これらの発表の場において、伝統ある高崎高校の名に恥じないよう、日々、部員一丸となって、いっその努力をして、活動を続けていきたいと思っておりますので、どうぞみなさまの御協力、御支援をよろしくお願い申し上げます。

(写真部元部長 3年 新井達也)

〈囲碁・将棋部〉

囲碁、将棋ともに団体戦県予選で優勝し、全国大会に出場した。囲碁では二年の石井拓が個人戦でも優勝し全国大会に出場した。

〈吹奏楽部〉

県コンクールで昨年に続き、金賞を授賞した。

＜平成2年度職員異動＞

◎ 転出者  
(全日制)

職名	氏名	教科	転任校等	備考
校長	磯貝 福七	英語	退職	県立文書館館長
教諭	石沢 信久	英語	退職	引続全日制特別講師
"	森 慶寿	"	退職	
"	岡田 豊治	国語	退職	教頭
"	西須 秀夫	数学	高東村	
"	清水 敏男	体育	高東村	
"	吉永 哲郎	国語	前吉中	女井中央
"	大山 善文	物理	吉中	中央
"	五十嵐 誠一	化学	中退	教員
"	生形 優哉	生物	中退	教員
教諭	内田 竜世	数学科	退職	太田東新採用
実習助手	廣田 智孝	世界史		事務長代理
事務主任	小池 樹清	世界史		館林高採用
非常勤講師	浜田 高橋	化学		

◎ 転入者

職名	氏名	教科	前任校
校長	金井 秀一	数学	前商女
"	及川 清一郎	化学	前中東
"	高橋 正誠	生物	前富沼
"	小泉 明司	国語	前利根
"	金井 明文	国語	前佐藤
"	坂田 和彦	国語	前波中
"	吉田 武隆	数学	前藤中
"	荒木 浩子	英語	前中
実習助手	女屋 多美	事務	
事務主任	本木 修史	事務	
"	桜井 修史	事務	



定期戦勝利の瞬間

第44回

高高・前高

定期戦 88対86

競り勝つ!

(通算24勝15敗3引き分け2中止)

燦々と降り注ぐ心地良い秋の陽射しを全身に浴び、愛校心にどっぶりっかり、勝負に一喜一憂したあの日。そう

高前定期戦

十二対九と僅かにリードしてむかえた本大会。前半を終えた時点で高々は逆にリードを許していた。どの競技も手に汗

部対抗	種目	一般対抗		
		前高	高高	高
前高	水泳	6	3	
前高	綱引き	0	9	
前高	ソフトボール	3	6	
前高	駅伝	9	0	
前高	玉入れ	3	6	
前高	陸上競技	0	9	
前高	バスケットボール	5	4	
前高	バレーボール	6	3	
前高	軟式庭球	6	3	
前高	卓球	9	0	
前高	硬式野球	0	6	
前高	軟式野球	3	3	
前高	剣道	6	0	
前高	柔道	0	6	
前高	空手道	6	0	
前高	弓道	0	6	
前高	テニス	6	0	
前高	サッカー	0	6	
前高	ラグビー	0	6	
前高	小計	39	45	

前高	86	総合	88	高高
----	----	----	----	----

握る熱戦を繰り広げるのだが、もう一歩

という所で苦汁をなめていた。

しかし、綱引きの九対〇。これが流れ

までも高々に引き込んだ。全学年ストレ

ートで引ききっての

完全勝利。圧巻であ

った。これで波にの

った高々は、次々と

各種目で勝ちを収め、

遂に勝利した。二点

差であった……。

定期戦を終えて、

元の生活に戻った今

でも、あの時のこと

を思うと体がじんと

熱くなる。この戦を

通して、形容し難い

何かを得ることがで

きた。今更ながら、

高々の良き伝統に感

(定期戦実行委員長 市川哲夫)

翠巒文庫 BOOK

卒業生の方々や本校にゆかりのある方々の著書で、学校へ寄贈して下さったものを図書室に展示し、生徒に利用させています。翠巒文庫と称し、現在(平成二年十月十七日)まで四百十二冊になりました。本年に寄贈していただきました書名を次に記します。

書名 著者

憲法と教育基本権 永井憲一 49回

憲法学習のとびら

# 最近の 進学状況について

平成二年入試も、三年担任の先生方を中心として、学習・生活指導に、面接等によるきめ細かな努力が積み重ねられました。

東工、一橋、千葉、都立、横市、早稲田、慶応、東理等で現役生もがんばりましたが、逆に、東京、京都、北海道、上智、立教、法政、中央あたりは減らしています。質と量の両面での向上が求められている高々において、まだまだ伸ばさなければならぬ余地が多々あります。生活の規律を確立し高々生らしい張りのある日々を積み重ねさせたい、授業の質と量を充実させ希望する大学に現役で

進路状況 (全日制) ( )内は現役

大学	年次	63年	平成元年	2年	大学	年次	63年	平成元年	2年
北海道		6(4)	4(1)	3(0)	青山学院		18(11)	15(8)	19(6)
東北		17(9)	16(6)	19(9)	学習院		6(0)	3(0)	9(2)
茨城		7(2)	5(4)	4(4)	慶応		32(15)	31(9)	34(17)
筑波		2(1)	8(7)	2(1)	国学院		9(3)	8(2)	8(2)
群馬		60(28)	55(34)	40(28)	芝浦工業		4(0)	2(1)	4(3)
埼玉		7(6)	9(6)	13(6)	上智		10(2)	14(9)	5(4)
千葉		9(4)	7(6)	10(10)	成蹊		3(0)	4(2)	6(3)
東京		8(4)	11(6)	6(5)	中央		31(12)	33(13)	23(4)
東京外語		0(0)	5(3)	2(2)	東京電機		12(3)	8(2)	8(1)
東京工業		2(1)	3(2)	6(4)	東京理科		35(4)	32(8)	26(15)
一橋		3(2)	7(2)	6(6)	東洋		8(0)	7(3)	12(1)
横浜国立		6(5)	5(3)	9(5)	日本		40(10)	59(17)	52(17)
新潟		20(11)	14(5)	6(4)	法政		27(5)	25(6)	13(2)
金沢		8(2)	11(7)	6(3)	明治		50(12)	55(18)	49(15)
信州		9(2)	11(4)	7(3)	明治学院		23(2)	22(4)	15(1)
名古屋		8(4)	9(3)	3(2)	立教		17(2)	18(5)	8(3)
京都		7(4)	6(-2)	2(1)	早稲田		43(13)	59(15)	57(30)
高崎経済		13(8)	12(4)	15(10)	同志社		7(3)	8(1)	8(0)
東京都立		2(2)	2(1)	7(3)	立命館		10(1)	10(1)	11(3)
横浜市立		5(2)	5(0)	6(4)	その他		149(42)	164(42)	166(48)

種別合計 (全日制) ( )内は現役

大学名	63年	平成元年	2年
A 国立	223(108)	230(114)	172(107)
B 公立	28(14)	26(6)	32(17)
C 私立	482(119)	526(152)	501(163)
A + B + C	733(241)	782(272)	705(287)
D 短大、各種他	18(4)	8(5)	11(5)
総数 (延数)	751(245)	790(277)	716(292)
卒業生数	404	394	415
現役進学者数	165	172	200
現役合格卒 <small>(合格者数/受験者数)×100</small>	41.1%	43.9%	48.8%

はいれるだけの実力をつけさせたい、これが教職員の願いです。  
平成三年入試では、入試センター試験二年目、また分離分割方式をとる国公立大五十余校、さらに私立大学のますますの難化等が予測されます。これらの変動を見据えつつ、高々での三年間が、将来、国家社会に貢献できるような有為なたくましい人材の基礎づくりの時期となることをめざしています。

(進路部長・真砂芳夫 61回)

「日本国憲法」なのだ/永井憲一

赤塚不二夫編

見るわかる教育基本法 永井憲一

英 伸三編

代数II宇内先生：高々もう一つの歴史

中曾根宇内 9回

食べもので病気は治る

「元氣」の革命 増補 石田英湾 54回

GENMAI:Brown Rice for Better Health

Ishida Eiwan 54回

暮しの中の危険：新聞のコラムより20選

島野 康 66回

国策企業・公企業論：国家と産業との関係

地方自治・地方公益企業論

蝦山政道 12回

般船砲兵遍歴：一兵士の参戦記録

須藤忠雄 33回

追善供養の仏さま 十三仏信仰

渡辺章悟 70回

税理士への道 鈴木正興他編

71回

各方面で活躍している同窓の方々はたくさんいらっしゃいますが、その方々の著作、あるいは高々に縁のある方の作品等、後輩への参考のためぜひ母校へ御寄贈いただければ有難いと思います。

なお第五十九期より図書館へ御寄付いただきました十数万円は、書架購入の費用とさせていただきます。御礼申し上げます。

(図書部長・松井正樹 59回)

平成元年度 同志会経常会計決算

(昭和64年1月1日～平成元年12月31日)

平成元年度 経常会計

収入の部

費目	平成元年度予算	平成元年度実収入	備考
前年度からの繰越金	609,293	609,293	
入会金	850,000	882,000	全日制424 通信制16
維持会費	5,000,000	5,505,000	2091名
利息	40,000	58,236	
合計	6,499,293	7,054,529	

支出の部

費目	平成元年度予算	平成元年度実支出	備考
会議費	800,000	591,698	平成2年度総会補助30万他
祝賀費	300,000	284,900	卒業証書ホルター、歌碑除幕式祝金他
送別費	250,000	203,000	平成元年度転退職員へ
慶弔費	100,000	93,610	葬儀花輪代
通信印刷費	500,000	207,346	維持会費納入礼状10万他
旅費	100,000	3,000	権名翠福会出席者
会報発送費	1,300,000	1,169,276	会報発送郵送料
同志会報費	1,300,000	1,317,318	会報編集・印刷費
事務費	600,000	416,664	人件費、事務用品代他
同志会長賞費	70,000	8,000	表彰状・記念品代
補助費	600,000	600,000	図書館30万、翠福体育会30万
雑費	50,000	68,988	翠福歌碑除幕式記念写真代他
予備費	529,293	477,000	卒業生ネクタイ止め
合計	6,499,293	5,440,800	

差引残高 1,613,729

100周年基金へ 1,000,000

次年度への繰越し 613,729

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

平成2年1月22日

高高同志会会計

小暮 暢 夫

飯野 良 二

矢島 哲 雄

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

平成2年1月22日

高高同志会監査

石井 敬之助

安藤 貴太郎

平成2年度 同志会経常会計予算

(平成2年1月1日～平成2年12月31日)

収入の部

費目	金額	備考
繰越金	631,729	
入会金	850,000	
維持会費	5,000,000	
利息	40,000	
合計	6,503,729	

支出の部

費目	金額	前年比(増○減▽)
会議費	800,000	
祝賀費	600,000	○300,000
送別費	250,000	
慶弔費	100,000	
通信印刷費	500,000	
旅費	100,000	
会報発送費	1,300,000	
同志会報費	1,300,000	
事務費	600,000	
同志会長賞費	100,000	○30,000
補助費	600,000	
雑費	50,000	
予備費	203,729	▽325,564
合計	6,503,729	

平成元年度 同志会特別会計決算

繰越金	金額	支出なし
繰越金	9,817,643	
利息	291,908	
(合計)	10,109,551	
平成元年度経常会計へ	9,551	
合計	10,100,000	

創立100周年準備基金特別会計決算

繰越金	金額	支出なし
繰越金	3,381,362	
利息	170,849	
平成元年度経常会計より	1,000,000	
合計	4,552,211	

第89回高高同志会  
新年総会へのお誘い

同志会の皆様には益々御健勝にて御活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、激動の平成二年、我々の母校高々も今年で創立九十四年を数え、近づく百周年に向け、着実に新しい歴史のページを刻んでおります。

高高同志会新年総会も年々盛況になって来ていますが、我々当番期(六十期)といたしましても、第八十九回総会が盛大に行なわれます様、一同努力しております。

なお総会後の懇親会では懐しき友と語り、酒を酌み交わし、楽しい一時を過ごしたいと思っております。

同志生の皆様、来年一月の新年総会には一人でも多くの御出席を当番期一同心よりお待ち申し上げます。

期日 三年一月二六日(土)  
時間 午後三時  
場所 高崎ビュートホテル  
会費 四〇〇〇円  
(当番期代表 有田喜一60回)

事務局だより

◎同志会は会員各位の納入して下さる二千円の会費で運営されています。同封の振込用紙で納入して下さい。会費を納入して下さる方々の数は年々増えつつありますが、よろしくお願い申し上げます。

◎「次回の同志会会員名簿刊行は一九九二年です」

類似の職業別名簿が本同志会とは全く関係のない機関で作成され、高額の料金を販売されているようですのでご注意ください。

本同志会の会員名簿は、一九九一年六月より準備が始まり、九二年五月末に刊行の予定です。この間会員の皆様にはお手数をおかけすると思いますが、是非御協力下さい。なお、問い合わせは全て「高崎高等学校同志会名簿刊行委員会(高崎市八千代町二一四一一)」が郵便にて行いますので、御承知おき下さい。

編集後記  
平成二年も数日を残すだけとなりました。多くの方々の御協力をいただき、同志会報24号が発刊の運びとなりました。御多忙の中、貴重な原稿をお寄せ下さいました皆様方に厚く御礼申し上げます。  
(本部幹事会)